



## 第5章 株式会社の勃興

- (1) 株式会社は19世紀後半になって産業への支配権をもつようになった。それは非個人的なものであり不在所有の結合体である。その目的は事業的利潤の追求にある。株式会社が産業に興味をもつのは、その産業を有利な事業を遂行する方法や手段としてのみであって金銭的制度にすぎない。だからといって、株式会社の発展が不公正なものとはいえない。それは、経済形態の成熟への過程であった。その動機はそれ以前の他の事業形態より、より大きい純利益が得られることにあった。「金儲け」「可及的最大の収益」「純収益」：「金儲け」を最大目的にする株式会社は、社会的承認を得たものであり、文明諸国民の関心が生活のための生産から利潤のための投資へと移行して以来のことである。
- (2) 貯蓄から株その他の形での投資を資本として財貨を生産するのであるが、会社金融の本質と効果については以下のように考察される。貯蓄は信用証券と引き換えに会社に渡される。このとき、財貨はないと思われるから請求権が多く発生すれば、会社金融による貯蓄動員は物価騰貴、通貨価格の低落を招く。金融取引は、生産的財貨の実際的な移動引渡しにおいて完結するものではなく、資金の移動とこれに相応する債権債務関係の創造をもって完結する。株式会社が支配的的制度になってしまったのは、価格制度のもとで貨幣的価値こそいかなる物質的価値に優るという信念に到達したからであり、信用取引が産業技術の進歩による財貨生産の増加量とは比較にならないほどに大きな富の額を増大させたからである。
- (3) 会社金融についていえば、株式会社は集合的信用取引から成立するものであり、株主が提供する資金は会社に委託管理される。株主に対しては会社は債務の非人格的結合体である。債務を担保としてさらなる資本を獲得する。証券は一定率の所得を生み、会社への質権を構成する。信用の膨張は物価騰貴を招くが、それは技術の進歩によって相殺される。貨幣的価値の膨張は、好景気を招くが統制を加えられてもなお不況や恐慌は起こってくる。
- (4) 株式会社は投資資金を基礎としてその予期の収益能力の額まで資本化される信用の一集合体である。社債、優先株、普通株などの資本化に対応する額の固定的費用を支払わなければならない。株式会社は繁栄を予期しているものであって、収益の減収は許されない。会社収益のための資金の必要は活動が競争的であれば、飽和状態になることはない。このことが信用膨張の限りなさを招き、結果として惨憺たる破産を招くことになる。大戦による物凄い消費と暴利獲得の時期の所産としての状況は正常な事業の本質をなすものである。また、物質的意味において足れる程度のものだけを自由に生産することは不可能である。技術の進歩は労働人口一人あたりの生産能力を高め、生産物一個あたりの生産費の低下と生産量の増大をもたらす。儲からなくなると借入れ資金に対する固定費用の支払いを維持するための資本家的怠業、事業家的怠業(生



産設備と労働力の使用停止)が起こってくる。販売闘争の重要さは株式会社金融の初期にすでに認められ、販売活動と総業はともに事業的戦略の方法であった。販売高の増加と生産量の減少は事業の唯一目的である。かくして自由競争制度はすたれてきて消費者の利益をそぐこととなり、事業経営の新しい方向は、云いかえれば、宣伝と不足との競争の機構である。株式会社出現以前の機構(産業的自由競争)とその後の機構(事業的販売と総業)との違いが顕著に認められる。

## 第6章 産業の将帥

(1) 19世紀の100年で産業の将帥といわれる人物は産業上の過去からの光輝ある継続のなかで、至高の地位をうることとなり産業の自由競争性に終始かわり、産業と企業の分離がはじまるまで人類の物質的支配の頂点にあった。

(2) 産業の将帥という制度はその初期、産業企業の冒険者であった。産業上の明察力と創意と精力とを兼備し機械的技術を理解し、より有用な財貨のより迅速な生産による自己の利得に専念した。事業家であり技能の指揮者であった。生産と収益能力の点において機械産業の発展に貢献し市民の憧れの的となった。産業の将帥の工匠的活動は今尚、好意をもたれているが、時とともに事業的原則に支配されるようになった。工匠のエネルギーは土地、労働、資本とならんで生産のための第4の要素と考える。雇い主=所有者と技術者との役割分担がはじまると、産業の将帥は事業の将帥への方向をたどりそもそもの活動部分は他に譲ることとなった。したがって、非事業家的技術者は有形的産業活動に専念することとなり労働(産業)と責任(事業)の分割が起こる。

(3) 産業技術は人間に対する物質的効用を目的としている。技術家の責任は技術家の良心に従っている。他方、事業技術の事業上の命題は技術的遂行や社会の福祉ではない。法律と慣習によって承認された虚構上の事柄(利買いや図々しさ、販売術や振りの技術)によって自己の利益を目的とし貨幣的価値を追求する。産業の将帥がその地位を保ち続けるには事業的財政的興味を追求せざるを得ない。初期型の産業の将帥(工匠的)にあった冒険的な企業精神は事業的企業における用心深い待機の態度に取って代わられることとなる。産業的事業の条件(1)~(7)(p・114~115)のなかで重要な項目は産業の生産能力の増大がひきおこす問題、総業の必然性についてである。

(4) 産業の将帥の変化とともに一般人の産業の将帥への憧憬は、資力の将帥への憧憬へと移り、資力の将帥が一般社会の共同福祉に貢献していると信じるようになった。政治、外交もこのことを支持するようになり持てる階級の道徳的卓越や公益性は市民的承認を得るようになるが、それはかつて諸侯や僧侶にあったそれらと同様である。



(5) 人間には工匠的性向と、なにかをやり遂げて際立った人物を尊敬し服従する性向がある。たとえば、19世紀の産業の将帥といわれるものはこのような人間の性向によって支持された。その基盤は民主主義国においては財産資格における優越であった。民主主義国アメリカにおいてはこのことが顕著であり、このことは不在所有者の利欲の実現がこの国の最も価値あることとされているからである。